

「ディアスポラのバルカン半島」木戸 雅子

ギリシャの北西の国境にプレスパ湖という美しい湖がある。湖の中央でアルバニア、マケドニア共和国、ギリシャが国境を接している。一昨年、念願になってこの周辺にある教会堂の調査に出かけることができた。隠元豆の畑が延々と続く荒涼とした土地に閑散とした小さな村が点在している。その一つの村で一人の老人と出会った。その日教会の広場にナンバープレートに「スコピエ」とある古びたバスが止まっていた。ギリシャとマケドニア共和国との関係は悪く、マケドニア共和国の首都スコピエから数十人を乗せたバスが来ているということだけで、何か異様な雰囲気がかかっていた。

私が教会で壁画の撮影をしていると、七十過ぎの老人が祭壇の前で自分の写真をとってほしいと話しかけてきた。その人はギリシャ人で、他のギリシャ人と一緒にスコピエから55年ぶりに里帰りしてきたのだという。涙ながらに語ってくれた話はまさにギリシャの現代史そのものだった。

55年前にこの村の住人は村中でここを追われて当時のユーゴスラビアへ移住した。出発前に25組の男女がこの祭壇の前で合同結婚式をあげた。大変盛大な祭りだったらしい。この老人もその中の一人だった。当時のユーゴスラビアは社会主義政権であったし、その中でも特にマケドニアは貧しかった。言葉も違う。移住後の苦労は並大抵ではなかっただろう。望郷の念は募る一方だったが、入国ビザは拒否され続けた。とうとう今日墓参のために一日だけ帰国ができた。けれども墓に行ってみたら自分たちの墓は更地になっていて、隣には現在の住人たちの立派な墓地があった。この蠟燭をいっただこへ手向けたらよいのかと流した。手に握り締められていた数本の蠟燭はすでに曲がっていた。妻は他界し故郷を再び見ることなく逝ってしまったという。

55年前といえば、市民戦争時代のことかと思って聞いてみると、老人は小アジアから移住してきたギリシャ人たちに追い出されたのだと答えた。小アジアからの移住といえば、まず思い出すのは、20世紀初頭のトルコとギリシャの間で行われた住民交換である。トルコに住んでいたギリシャ人が百数十万人という規模で突然ギリシャに移住させられ、各地にその居住区ができた。その後もトルコを追われたギリシャ人の移住は続く。この辺境の地にもその影響が及んだのであろう。それにしてもここからスコピエは160しかない。その距離を越えるのになぜ55年もかかったのだろう。

今夏私はセルビア経由で久しぶりにスコピエに行く機会を得た。30年前にギリシャに留学していたときに行ったときは、小さな貧しい町だった。ところが今のスコピエは全く別世界で、近代的都市に変貌をしていた。ユーゴスラビア解体後マケドニアにはアメリカ資本が流入して街のインフラが進んだらしい。人々の暮らしもセルビアよりもずっとゆとりがあるように見受けられた。あの老人は近代化したこの街でどんな暮らしをしているのだろう。またギリシャに行けるだろうか。バルカン半島の現代史は離散(ディアスポラ)の歴史である。今も紛争が新たなディアスポラを生み出している。研究調査で訪れる土地の人々と触れ合うたびに、また別のディアスポラの話聞く。世代を超えて幾重にも連なる過去の辛い記憶。それを背負う人々の話はいつもとても重く、深く心にしみ込んでくる。

■ 国際文化学部報「はなみずき」第4号(2006年3月)掲載 ■